

荒木油送 荒木社長

「社長ではなく、経営者でありたい」

個人面談で従業員の懐に飛び込む

【愛知】「社長ではなく、経営者でありたい」。自らの気構えをそう語るのは、石油関連事業を展開する「荒木石油グループ」において主に輸送部門を担う荒木油送（豊橋市）で代表を務める荒木暢彦社長。同社では、あいさつを軸としたコミュニケーションを推進、習慣化することで社内における好循環と事故の低

減などにつなげている。社長が代表として就任したのは、今から3年ほど前。「血の通った経営をしたい」との意識から個人面談を積極的に取り入れ、従業員の懐に飛び込んだ。

との考えにも触れる。また「体力には自信がある」と自負する社長は、自らも積極的な動きを社内実践することによって、従業員とのさらなる一体感を促進。「満点を求めず、各自が持っている長所に目を向けることが、我が社の文化」という社風は、定着率の高さにもあらわれており、新しいものには柔軟に対応しつつも「時代に振り回されることなく、守っていきたいものがある」との決意を述べ、昭和14年から続く同グループにおける歴史の重みが伝わってくる。

荒木社長



幼少の頃から打ち込み、高校時代にはキャプテンを務めたという剣道で培われた熱意と、社長ならではの洞察力で臨んだ個別の面談では、「思っていることを、全部出してほしい」との覚悟で文字通り腹を割った話し合いを実現。当時を振り返り、「予想していたよりも前向きな意見が多く、嬉しく思った」と感想を述べ、「そんな従業員の人生を支え、働けて良かったと思えるような会社にしていきたい」

変化の激しい社会のなかで「凡事徹底」の精神を掲げ、「基本に忠実な業務の積み重ねが、すべての品質向上を生む」との見解も示している荒木社長。「苦勞する姿を含めて、その背中を見て育ててきた」と語り、父である荒木義夫会長に対する思いは、「自身の目標として、まず間違いない存在」との言葉が、力強く物語っている。

（朝妻聖一）